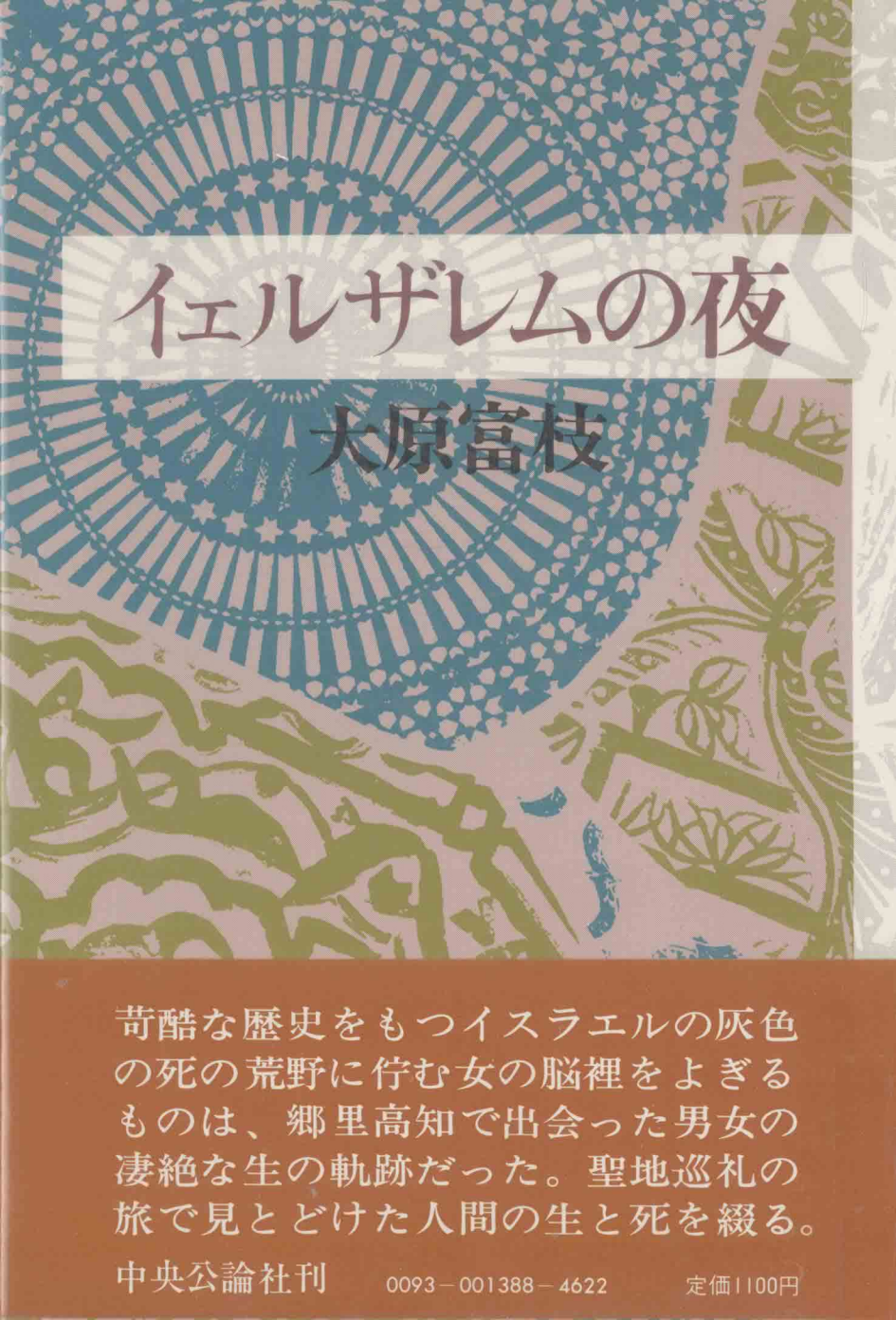




イエルザレムの夜

大原富枝

苛酷な歴史をもつイスラエルの灰色の死の荒野に佇む女の脳裡をよぎるものは、郷里高知で出会った男女の凄絶な生の軌跡だった。聖地巡礼の旅で見とどけた人間の生と死を綴る。

中央公論社刊

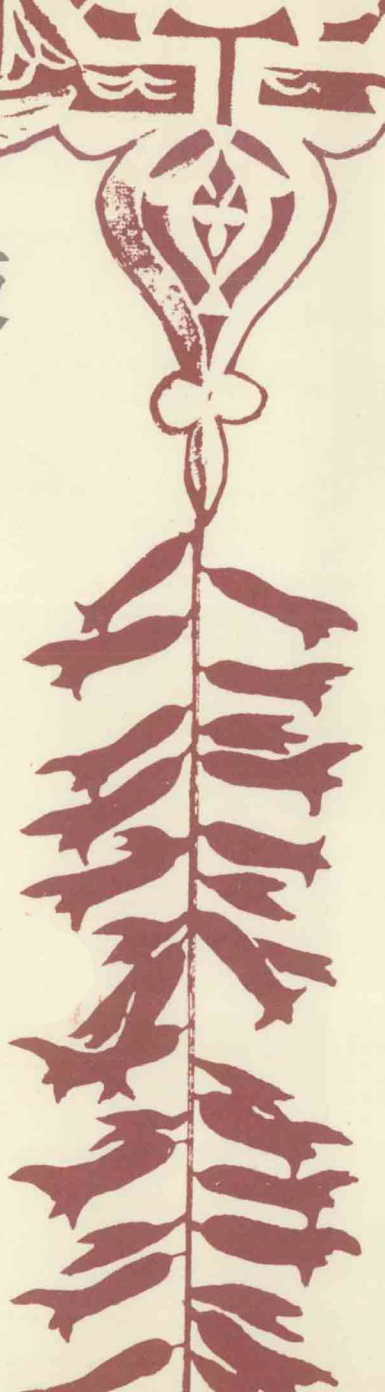
0093-001388-4622

定価1100円

イェルザレムの夜

大原富枝

中央公論社



イエルザレムの夜

定価二一〇〇円

昭和五十五年九月十日印刷
昭和五十五年九月二十日発行

著者 大原富枝

発行者 高梨茂

印刷所 三晃印刷

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノハノ七

振替東京二一三四

検印廃止

©一九八〇

目次

パランの荒野	3
エリアの泉	29
ソドムの林檎	63
イエルザレムの夜	97
ガリラヤの湖	151
マグダラ村のマリア	187

装
幀／朝
倉
攝

パ ラ ン の 荒 野

テル・アヴィヴ空港に着いたとき、陽は落ちたばかりであった。

空港前の広場に、ダビデの星の国旗が高いポールの上に五本、風がないので垂れたまま、街燈の光を受けている。その下を雑然と人々が歩いてた。目的をもった歩き方ではなく、ぶらぶらと歩き、表情もそれにふさわしくゆったりとしている。子供たちは大人のあいだを駆けたり、ふざけあったりし、老人たちは黙ってゆっくり空を眺めている。

正面が西にあたるので茜色がまだ残っているが、その上にへんに黒々と爛れたような横雲が被さるように棚引いていて、重なり合った部分が異様な光景に見えた。不気味といってもいい空のたたずまいで、初めてこの国の土を踏む笛田あさの眼にやきついた。地上は夜のはじまる直前のほの暗さでじっと垂れて動かないダビデの星の旗の下を、たくさんの男たちがぶらぶらと歩いているのが、ふとガス燈時代の風景を今見るような思いがする。『望郷』とか、『外人部隊』などの昔観た映画のひとつまを思い出している。なぜかわからない、むんと蒸れ立つように、それらの舞台になっているアラヴの大地の匂いを嗅いだ心地がした。

外燈はたよりなくぼんやりと燈っている。昼の光がまだ半ば居据っていて、それが外燈の明るさを奪っている。その周りの方が却ってほの昏く感じられるような奇妙な時刻なのであった。

暑熱の国の夕べのひとときで、これから涼しい夜へかけての、とても家のなかにこもってなどはいられない、心の浮き立つ時刻でもあったろう。その群衆は男たちばかりで、女の姿は殆どない。たまに見かけるそれは、笛田あさたちと同じく外国人の旅行者らしかった。

ふと彼女の眼を惹くものがあった。一人の老人で、どこといえず異様なものが彼女をとらえた。どこか身体の一部が不自由らしく、姿勢が歪んで見える。足にも、肩にも不自由な部分があるらしい。注意して眺めると、顔貌にもどこか普通でないもの、傷痕というよりないが、さてそれが銃創でもなければ、刀疵などというものでももちろんない。強いて言えば心の傷が顔ににじみ出てしまったといってもいいだろうか。といっても苦渋なしわをたたんだ顔というわけではない。むしろ、つるりとした感じが、火傷でも受けたのだろうか、と思う異様さである。

長く見つめては悪いものを笛田あさは感じて眼をそらした。ところが、一度眼が馴れてしまうと、たちまち別の同じような老人を彼女の眼はとらえてしまうのであった。決して一人二人ではなくそのような老人が歩いている。身体の一部が不自由というだけではなく、年齢が近いというだけともちがう、言葉に現しがたい共通したものが老人たちにはあった。

どの老人も温和で和やかに熱帯の国の夏の夕べを愉しんでいる顔なのだが、にもかかわらず周りの人々からきわだたせるものがその人たちにはあった。生きてきた歳月が、他の同族の人々とどこか異質のものだった、とでも言おうか。笛田あさは、どこかで同じような老人たちを見たことがある、と思った。そうだ、どこかで見たことがある。

若いときにはわからなかったもので、いま少しわかりかけてきたものに、老人の時間というもの

のがある。笛田あさは、自分と同年輩か、あるいはちがっても僅かに前後するだけにちがいない彼等が、後に引きずっている、いや身の周りに漂わせている過去の時間の異質さに気がついた。彼女はあつと思ひ、いやちがうのだろうか、と内心迷っていた。

十数年も前であるが、笛田あさはヨーロッパ旅行をしていて、東ヨーロッパのある国で、ナチスのユダヤ人収容所の一つを予期しないで観ることになった。

昔は要塞であつたというその収容所の門前には無数のユダヤ人犠牲者の墓碑が並んでいた。建物の内部にはかずかずの痛ましい記録とともに、拷問の道具、積み重なり折り重なった死体の写真、死者の骨や皮膚でつくられたというパイプやペーパーナイフや財布など、吐気をもよおすような品々も見学させられた記憶がある。

しかし今度の旅は、聖地巡礼ということであつた。それらの記憶は頭のなかで一応別の世界に属することとして区分がついていた。

国はユダヤ人の国イスラエルであつたが、彼等の信奉するユダヤ教は、いまはキリスト教とはまったく別のものである。その歴史が地理的に重なり合っているのに過ぎない、という浅い理解が笛田あさにはあつた。

そのような判然とした区分が必ずしも正しいとはいえない疑問も、いまは感じてゐる。しかし、旅をしていたときには、そう割切つてなにも不都合は感じない幼稚さであつた。

戦後も三十数年が経ち、イスラエル建国から三十年が近いのである。しかし、この国の土を踏んだとたんに、このような老人たちを見てしまったことに、笛田あさは密かな衝撃を味わつて

いた。

この老人たちは仕合せにも体力の盛りの時期にあの不幸な時代に遭遇したことになるだろう。そのために運よく苦難の時代を生き抜くことができたのだと思われる。ほの暗い街燈の下を、ひっそりと垂れて動かないダビデの星の国旗の下を、黙って、しかし明るく暢やかな表情でゆっくり歩いている。少し顔を仰向けるような姿勢で、不自由な身体をべつに不自由そうではなく、満ち足りた様子でそぞろ歩いているのである。

あさはあるいは思いちがいをしているのかも知れなかった。——彼等はほんとうは独立後直ちにはじまったアラヴ諸国との戦争（それはまだ現在も続いているのだと考えるべきだったが）で傷を負った人たちであるのかも知れない。

あさはそう思い直そうとした。しかし、老人たちを群衆のなかから識別したときに受けた強烈な印象と直感、なかなか消しがたいものになっていた。老人たちに近づいてその腕を注意深く眺めれば、ナチスの忌むらしい焼印の痕がいまも残っているだろう、と思わずにいられない。人は他人の過去をも、自分の記憶のフィルターを通して見てしまう。

それは誤りをもおかし易いであろうが、過去を持たない人間の無関心に通過してゆく貧しさよりは少しましかも知れない。

笛田あさのそのような思いは、広場に出てほんの十分足らずそこに立っていた間の想いにすぎない。すでに広場の街道には彼女たちのためのバスが待っていて、大型の旅行鞆はその屋根に積みこまれ、アラヴ人らしい濃い眉の運転手と、日本であさも一度逢ったことのあるヘブライ大学

に留学した日本人の青年とがロープをかけている。

そのような作業を、広場の一隅で行っている笛田あさたちのグループも、熱帯の国の夏の黄昏に人々の群れてそぞろ歩きしている、何の音とも分ちがたい雑然とした賑わいのなかに溶けこんでいる。

——案外、暑くはないねえ。

誰かがいつている。

——もっとも、もう夕方だけだね。

——いや、ここ一週間ほどは連日、四十度越す暑さでうだっていたんですよ。今日から少し涼しくなったところです。

この国の旅のあいだ、案内をつとめてくれる青年が答える。彼が最後に忘れものはないね、と念を押しながら、みんなと向き合う形にガイドの席に乗りこむと、バスはグループの六人だけを乗せて出発した。

この南の国でも黄昏の長い季節であるが、すでにほの暗く地上は暮れはじめている。しかし、両側につづく耕地の緑と作物の種類は見分けられないほどではない。とうもろこしやトマトの畑が見え、葡萄畑らしい茂みがずっと遠くつづいている。恐らく海岸近くまでつづいているのであろう。その緑の平原が、いまにも暮れてしまいそうでいてなかなか暗くはなってしまう薄い薄明がつづく。

旅においてのその国とのまみえ方は、人と人の出逢いと同じく意味が軽くはないだろう。

アテネには夜明けの薄明に着き、テル・アヴィヴには黄昏に着いた。どちらも暑熱の日中に到着するよりかは意味があっただろう。殊に後者の場合そうであった。

——この両側がいわゆるシャロンの野で、この国のなかでもっとも肥沃な穀倉地帯です。ずっと北の方からテル・アヴィヴ、キリスト時代にはヤッフェといわれた市街の南の方までつづきます。

この国の大学に留学し、いまはそこに勤務している、考古学と聖書学を専攻しているという青年がガイドである。略図を見ると空港はテル・アヴィヴ市街の北の方であって、海岸からは少し離れているらしい。

私はシャロンのサフラン

谷のゆりの花

ソロモンの雅歌をあさは思い出している。

(あなたの二つの乳房は、／ゆりの花の間で草を食べているふたごのかもしれない、／二頭の子鹿のようにだ。／そよ風が吹きはじめ、影が消え去るころまでに、／私は没薬の山、／乳香の丘に行く。)

もっともここにうたわれている「ゆり」は日本の百合ではなくて、四月になるといちめんに咲きはじめる野生のシクラメンか、あるいはアネモネをさしたものだということだ。シクラメンに

も白やうす紫があり、芳香があつて、アネモネも真紅だけではなく彩りがゆたかだという。

アブラハムが神からあたえられた契約の地、カナン。乳と蜜の流れる地、がここなのだ、と笛田あさは昏れてゆく外を眺めつづけている。

（あなたのくちびるは蜂蜜をしたたらせ、／あなたの舌の裏には蜜と乳がある、）

（あなたの産みだすものは、／最上の実をみのらすぎくろの園、／ヘンナ樹にナルド、／ナルド、サフラン、菖蒲、／肉桂に、乳香の取れるすべての木、／没薬、アロエに香料の最上のものすべて、／庭の泉、湧き水の井戸、／レバノンからの流れ。）

あさがこれらの詩句を思い出すのは、この暑熱の国の夏の黄昏が吐く大地の息づきのためであった。むんと香気が（それも淡泊なこと好き日本人好みではなく、もっと執しつこく濃厚な）蒸れ立つような生命力が空気のなかにある。ナルドの香油といい、没薬といつても、どんなふうに匂いたつものなのか、想像するしかないが、想像の世界としては、はっきりわかる心地がする。この国の夏の黄昏にふさわしいものだと思う。

バスはやがて、もうすっかり燈の明るい市街にはいつて今宵の宿であるホテルに着いた。部屋にはいつて窓の外を覗くまで、海岸のホテルであることはわからなかった。

はるか下の方に海水プールと海があり、海岸の遊歩道と、遊園地が見える。といつてもそれらしい施設がべつにあるわけではなく、小さい広場に簡便な椅子とテーブルがあつてたくさんの男女がビールを飲んだり、そぞろ歩きをたのしんだりしている。

明日はもうこのホテルをたつて南方、シナイの方へ旅立つことになっている。大鞍はエルサレ

ム行としてあずけ、二、三泊用の小さい鞆に必要なものだけを詰める。それを終ると夜が更けた。ベッドにはいる前に窓のカーテンを少しあけて眺めたとき、窓の下の愉しげな語らいとそぞろ歩きはまだつづいているのだった。時計はすでに午前二時をさしている。

祖国を失ってから二千年に近い流亡の歴史をもつこの民族が、自分の国を持つことの出来た喜びを、こんな夜のなかにも見てしまうのは、笛田あさのような旅の異邦人の感傷であるだろう。

そうは思うものの、あさはずっと前に、カスピ海に沿いの公園の遊歩道を、その国の人たちに混ってそぞろ歩きした夏の宵のことを思い出し、眼下の風景と思い比べている。それはやはり同質のものには思われないのであった。

ベエル・シェバとは七つの井戸という言葉であり、この名を持つ街は砂漠のまん中にあるかなり大きな都会であった。

テル・アヴィヴを朝出発して、正午にはその街にはいった。

その少し手前からバスは広大な砂漠にはいつてゆく。灰色の雲のような羊の群と、聖書に出てくる黒い山羊をつれた遊牧民^{ベドウィン}の姿が見えてきたとき、笛田あさは心の昂ぶりが遠浅の海に寄せる波のように自分のなかに起るのをおぼえた。何回もこの国を訪れ、聖地巡礼したことのあるグループの他の人たちとはちがって彼女は生れて初めて砂漠というものを実際に見るのである。右の窓を眺め、左の方を眺め、砂漠のまった中に身を置いている自分が、眺めても眺めても信じが

たいたのであった。

灰色の山脈（やまなみ）のように遠く高く稜線を重ねて展開し、地平線は煙るように空に溶けこんでいる。まさにこれが砂漠というものであった。

一つの近い稜線を背に、人影がその年恰好などおぼろにわかるほどの距離に、遊牧民の幕舎が三基ほど張られている。幼い子供が駆け、若い母がそれを見守って立っている。

反対側には車道に近くユーカリの太木が並木になって茂り、その柳のような枝が遮蔽幕になっている木陰に、数人の遊牧民の女たちが輪になって坐り、話に興じながら羊の番をしていた。

車を停めさせカメラを向けると、彼女たちはさっと黒いヴェールを頭からひきかぶり、いっせいに背を向けてしまった。その真黒い背中の並んだユーカリの木陰の風景はじつに静的であり、宗教的でさえもあったが、ばんと張って視線を跳ね返す女たちの鋭い気迫が露わに見えた。カメラを持たないあさは、それを心のフィルムターにやきつけた。

——あ、はげたかだ。はげたかがいいますよ、左側！

ガイドの青年が腰を浮かして叫ぶように教えた。あわてて覗いたが、右側の窓際に坐っていたあさには何も見えなかった。

にもかかわらず、あさは、はげたかがいた、はげたかを見た、と思った。マントを羽織った大男たちがうっそりと数人群れて立っているような、そんな影を心に焼きつけてしまった。不気味なマフィアの男たちのような姿をして、はげたかはあさの心に残った。

——あ、おかしいと思ったら、あそこに山羊が死んでいる。いや倒れている。やつら、死ぬの

を待っているのですよ。

ガイドの青年はすぐつづけて言った。倒れた黒い山羊も、もちろんあさには確認しようもなかった。

砂漠の中を真直ぐに走る広い弾丸道路で、車はみんな二百キロくらいのスピードで走っている。こちらはバスとはいえ、六人だけのチャーター車で相当のスピードは出ている。

影も形も見なかったにもかかわらず、テレヴィジョンだったらここでカメラが一回転して一匹の瀕死の黒い仔山羊の姿をとらえてくれるのだな、と思ったとき、笛田あさはまた確かに瀕死の黒い仔山羊を見てしまった。文明というものは人間を不幸にする、とあさは思ったものである。

そう思うことで、あさは砂漠のただ中にいる自分をとり戻した。弱い者、病む者はとり残され、置き去りにされ、群を離れた瞬間から確実に死がはじまるのだ。はげたかだけが、少し離れたところから、弱者の、病者の、死の完熟するのを待っている。これこそ砂漠というものだった。たちまちにして死が生きものを物質に変え、それが他の生きものの生存を支えるという、自然の摂理がまざまざとここにはある。

ベエル・シェバ、七つの井戸、それはアブラハムが掘った井戸をいうのである。井戸はここでは生命そのものであった。砂漠の真ん中にこのような都会が生れたのは、水脈に恵まれているからだ。

正午近い熱帯の太陽の照りつけている街はからっと乾いていて明るい。ブーゲンビリアの花が咲いている。ガイドの青年を先頭に、グループの人たちは連れ立って市場へ果物を買いに出かけ